

(出水郡高尾野町紫引堂前)

位置と環境

鹿児島本線高尾野駅の北々東約400mに位置する標高約40mの扇状地縁辺部に立地している。

調査の経緯

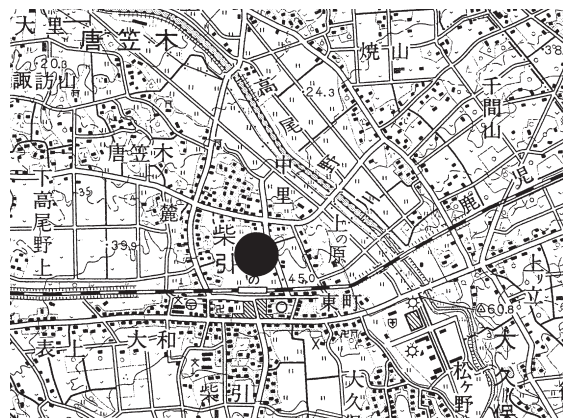
昭和46・47年(1971・72)、県営ほ場整備事業に伴い高尾野町教育委員会が河口貞徳に委嘱し発掘調査を行った。

遺構と遺物

埋葬遺構が26基あり、そのうち17基は覆石墓とよぶもので、くぼみに遺体を納め、その上を安山岩の板石で被覆したものである。土器以外に副葬品はなく、大半は弥生時代中期の土器を共伴するが、成川様式の土器を共伴するもの5基、弥生時代後期の土器をとまなうもの1基、時期不明のものが2基ある。

つぎに、葦石土壙墓とよぶべきものが2基ある。うち1基は17号である。長軸144cm、短軸85cm、深さ13cmの長方形をした土壙を安山岩の板石で屋根をふくようにおおったもので、葦石上に弥生時代後期の免田式土器の長頸壺1個が供献されていた。この土器は高さ27cm、胴径18cmの胴がソロバン玉状になった平底の土器で、肩部に13条の沈線と下弦の重弧文6葉が施文されている。全面でいねいにみがかれ丹塗りされている。ほかの1基は2号である。長径1.2m、短径0.8mの楕円形をした土壙を葦石でおおったもので、葦石下部に成川式土器壺の破片1個があった。

残り7基は地下式板石積石室墓で、石室の形態は長方形6、円形1(5号)であった。石室の石材は長方形のものも円形のものもいずれも横位に使用されている。そのうち5基には剣、刀子、鏃などの副葬品があり、軟玉製勾玉も1個見られた。1号から長さ31cm、身幅3cmの鉄剣1と柳葉形の鉄鏃1が出土している。3号からは9本の鉄鏃と刀子1が出土しており鏃は柳葉形2、圭頭形5、三角形1、のみ頭形1である。うち2本の柄部には桜皮が残っている。5号からは長さ26cm、身幅3.6cmのやや幅広い剣と、8本の鉄鏃が出ている。鏃の形は柳葉形5、



第1図 堂前古墳群の位置

圭頭形1、三角形1、刀身形1である。3号出土の鏃に比べてやや小さい。これらの年代は副葬品や周辺から出土した土器からみて5世紀を下ることはない。

葦石土壙墓と地下式板石積石室墓とはよく似ており、とくに長方形の石室をもつ地下式板石積石室墓は近縁性が強い。

特徴

弥生時代後期から古墳時代にいたる埋葬遺跡で、地下式板石積石室墓の祖原にかかわる重要な遺跡である。

長頸壺が墓へ供献されている特徴的出土状況を示している。

資料の所在

出土遺物は、高尾野町教委が保管し、その一部は高尾野町歴史民俗資料館に展示されている。

参考文献

河口貞徳・上村俊雄1971「別府原古墳・堂前古墳調査—地下式板石積石室について」『考古学雑誌』第57巻第1号 (河口貞徳)

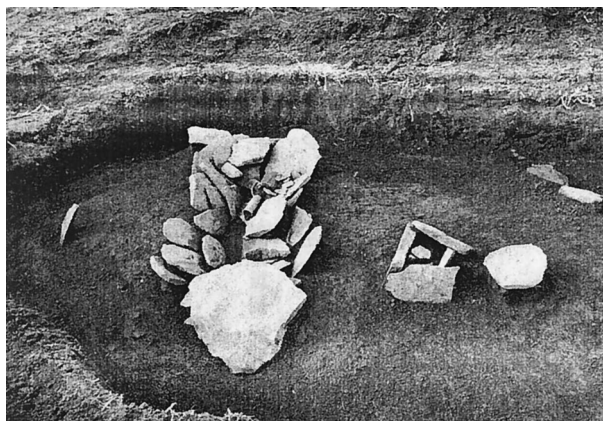
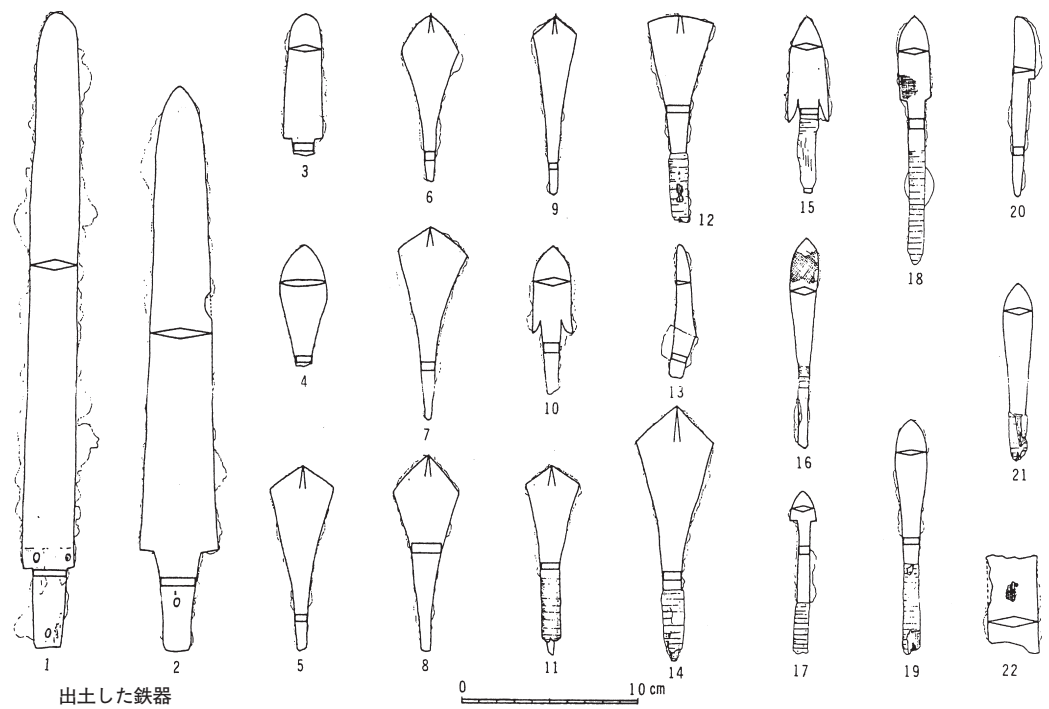
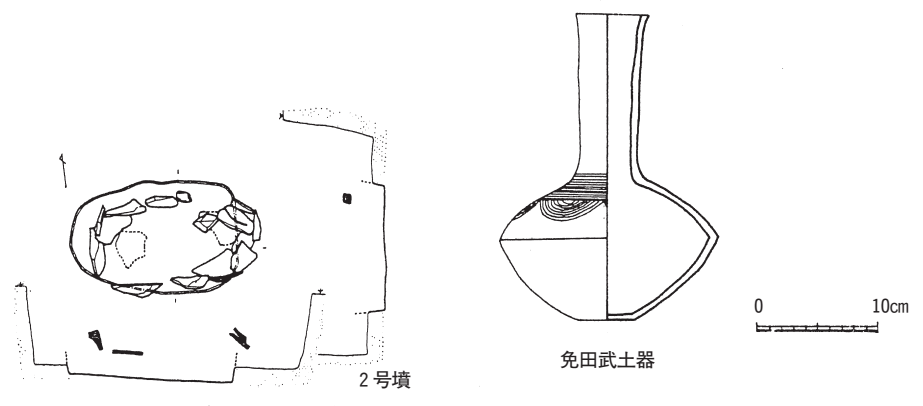
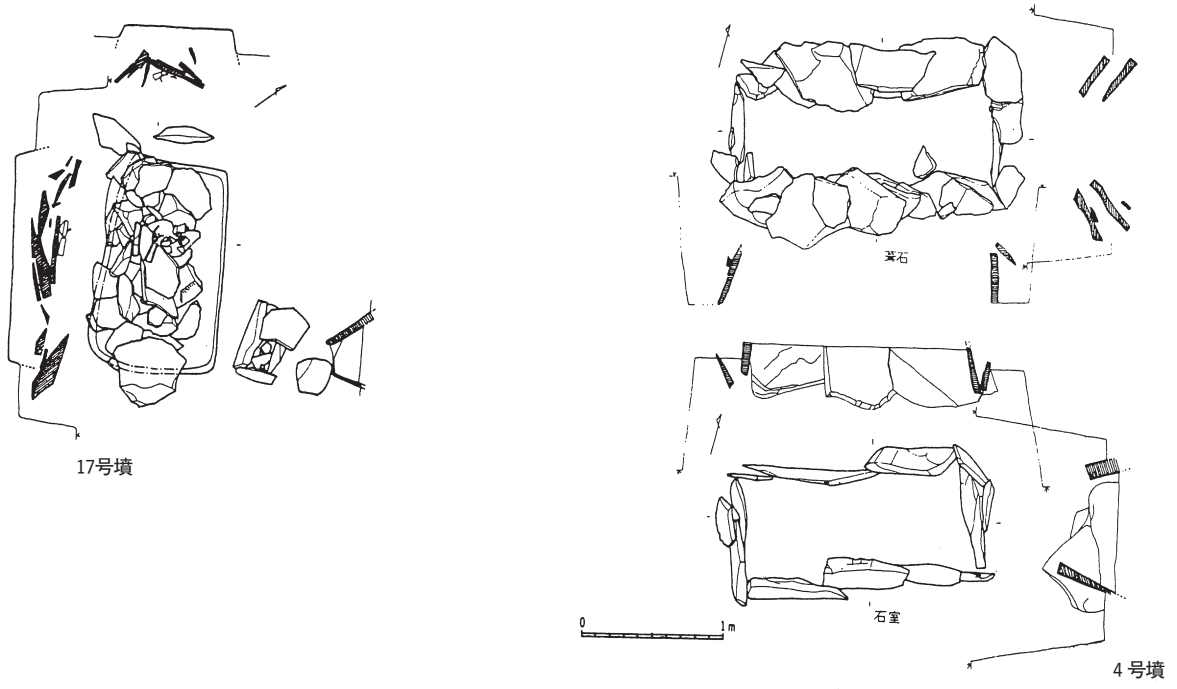


写真1 17号墳



第2図 1・3—1号墳, 4~13—3号墳, 2・14~21—5号墳, 22—9号墳